

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 5 (3)

—— 1924年10月1～31日 ——

小池辰雄

○1924年10月1日 (水)

雨。雨の一日。静かな一日、読書の一日、深く考えさせられた一日。而していつものぞみ来るものは光である。光に臨まれて、彼を仰ぎ瞻て、感謝せざるを得ない。雨の日も、光あり。この光は永久に絶えざる、いと暖かき、いと歓喜なる光なり。エホバよ、光を全身全霊に浴びせかけ給え。光のうちに起き、光のうちに歩み、光のうちにいねしめ給え。アーメン。今日からお昼はパンと定めた。胃腸の能きのために。二食主義は出来ぬから節食主義である。冷水摩擦と節食主義、菜食主義である。

(参考) 大根、強力ジアスターゼ、ビタミンC大量、ビタミンB少量。葉、ビタミン著量含有。徒歩主義、節食主義、冷水摩擦、間食廃止。自然主義、日光浴、空気浴。米、麦、蕎麦、パン、ウドン、馬鈴薯、薩摩芋(太ランタメ)。ゴマシオ、鯛味噌、大根オロシ、梅干。昆布、ワカメ、ヒジキ、海藻類(カルシウム食糧)。菜食主義。生卵子、生牛乳、トロロ芋、カキ、海藻、チーズ、バター(精力ヲ盛ンナラシムルモノ)。ウナギ、泥鰌、海ノ小魚、牛蒡、人参、玉葱、ニンニク。鶏肉。

○1924年10月2日 (木)

晴。

汝盗む勿れ、汝貪る勿れ。

これ今の世の中に最も適せる誠めの言葉である。何たる末世ぞ。如何なる社会でも問題の基をなす原因は「金銭」である。このよき秋の日、美わしき田舎の自然に包まれてさえ、かかることを感ぜしめられるこの世の饒季ぎようきなることよ。金によつて問題は起こり、金によつて解決せんとす。かかるは到底。真の平和を得るに不可能事である。

汝貪る勿れ、汝盗む勿れ。

この警鐘を乱打して世界のはてからはてまで走り廻りたくなる。汝盗む勿れ、汝盗る勿れ。これすべての問題の解決の鍵である。平和はここに生まる。

晴れ晴れした秋の野外運動の愉快なりしよ。今日もまた感謝する。隣りのお女将さん、面倒もいとわず栗飯をたいてくれた。大いに美味しかったことを、礼を云った。



○1924年10月3日(金)

晴。起床6時半。戸を排す。裸体になって井戸側へ行く。井水を汲んで冷水摩擦をする。これが毎朝の心身爽快法である。筋肉の緊張は非常なものである。畠に出て、新鮮なちその実をとって来て朝食のとき食す。菜食、野生、天然そのままのものが好きである。人工的菓子類の如きは近頃あまり好まぬ。サツマイモ、栗、大根、梨、なんでもよし。天然物によって我は育てられんことを欲す。

男らしき人間、神に絶対の服従ありて、人に決して依らざる人間、信仰に生きる忍耐強き人間に徹底せんと欲す。神よ、願わくは硬き御手によりて導き給え。

秋の野外の心地よき、見事なSun set〔日没〕をながめつつ帰宅した。入浴。夕食。愚かなるものよ、汝は。愚なるもの、愚かなるものの座に加わることなかれ。汝はその丹田に男らしきしつかりした、落ちつける力を常に置けよ。何を食わん、何を飲まんにあらず。汝が食に対して如何なる態度を持するかによりて汝の身体は太るか痩せるかである。

神はよく我を知り給う。最もよく我を知り給うのは我が絶対の信賴者たる我が神なり。神よ、願わくは堅ならしめ給え。賢ならしめ給え。義務に忠実なること兄上の如からしめ給え。アーメン。

母上様の送ってくださった、『新精神』9月号、「病みて不安の人に」を有難く拝読した。母上様の御心に深く感謝し奉ります。願わくは、神の僕たらしめ給え。すべてのことは主のため、であります。主よ、主よ、我は主のものなり。アーメン。

○1924年10月4日(土)

晴、曇、驟雨。起床7時。桐寮は杉浦が来て4人となる。近藤と宣ちゃんは一寸上京する。午後から半日、夜7時までは散歩ともつかず、勉強ともつかず、甚だ不信仰な時間を費やした。天候も蒸す様な抑えられる様な、秋にしては珍しい妙な模様であった。夜に至り心落ちつき、主と共にありて、桐寮には誰も居らざりしも、否、居らざりしがため、かえってよき時を費やした様であった。母上様にもお手紙を差上げた。感謝なる安息日の迎えられんことを。兄上よ、我にあれ。我、兄上にあらん。アーメン。

○1924年10月5日(日)

曇、驟雨。午前7時半起床。バイブル。散歩して、小川で真砂を拾った。何とも云えないいい気持ちである。11時帰寮。小刀を磨いたり、整理をしたりしているうちにお昼。午後からテニスをした。夕方は僕独り。夜おそく宣ちゃんが帰って来たが、夢現であった。

○1924年10月6日(月)

雨。今日は終日雨である。運動が出来ず自彊術をした。読書をせんとすれば、5、6人来



りて、やや妨げをなす。蓄音機にかかる静かな晩にきくのは、いいものである。あまりに贅沢すぎるかも知れない、桐寮に蓄音機を置いたのは。僕はもつともつと苦しみを受けなければ生きて居らるべき人間でない様である。神はよきほど僕を試練して下さるにちがいない。故にうれしくある。ちよつと眼が充血して今日は片眼でいたがその不自由はかなり読書その他のことにさしつかえる。これによりて母上様の御事を思えば、僕は日々の贅沢、不心得、欲心について、火刑に処せられて可なるべき人間である。ああおそるべき罪人。神よ、神の人たらしめ給え。神に帰らしめ給え。献身、信仰の実行者、雄々しき勇者、堅実なる義務遂行者、堅忍なる忍耐者たらしめ給え。

汝、弱きものよ、汝は健全なる精神と健全なる身体とを欲せざるや。もし欲するならば、徹底せよ。火の如く熱き人たれ、水の如く冷静なる人たれ。

○1924年10月7日(火)

曇。天候は本復しない。雨雲が一日漂つて、時々、水をもたらした。午後の独逸語の時間、劈頭にあてられた。単語は索いてあつたが意味がわかつていなかったため醜態を演じた。我ながら不甲斐なさにあとで慙愧に堪えなかつた。これも今までの不勉強のあらわれと思ひ奮然たるものが心中に湧いた。汝の不勉強と不徹底との積罪は今日生々みたり。汝の浪費せる時間は、ああいとも大なるかな。汝の浪費せる精力は、ああいとも大なるかな。汝、愚かなるものよ、努めよ、償えよ。汝、今日の恥辱は誠にふさわしき賜なり、感謝してこれを受けよ。誠に感謝してこれを受く。我は希望に生く、将来に生く。守れ神よ。助け給え。光をあらわしめ給え。いとも主にふさわしき葡萄の枝たらしめ給え。

独逸語、1日3頁。英語、1日3頁。必読すべきことを定む。

汝の胃腸をして常に余裕あらしめよ。甘い菓子類と獣肉類は厳禁である。身に害ありて益なきものである。

神よ、神の国のことを日々学ばしめ給え。神の義と、毎日なすべき仕事とをよくわきまえしめ給え。食のことは我が思うべきことに非ざるなり。我はいつまでもいつまでも罪の身を以て、あつかましくも——ああ主の御約束によりて——主のためにはたらきてこの世の旅をなさんとするものであります。願わくは、すべての罪をみのがし給いて、我がこの希望をよしと見給いて助け給え。救い給え。御光を働かしめ給え。アーメン。

○1924年10月8日(水)

雨、夜の月と星。日没まで雨は降りつづいて居た。而も蒸し暑かった。秋には珍しい変な天気である。夕方から中川で桐水会を催した。来会者11人。2時間ほど楼上に送り8時頃桐寮へ引き上げた。二人増えて13人となった。14人で全員であるから一人欠けていたが、附属の連中はまず皆あつまつたわけであつた。錢まわし、ジェスチャーなど或は色々な相談、



談話に愉快に時をうつして12時に及んだ。水戸の附属の連中はおとなしい。本当に和氣が満ちていた。酒氣のない集まりである。これだけでも感じがよくあった。散解するころは月と星が久しぶりで明るく輝いていて、この会を喜んでくれるようであった。僕にはいろいろの感謝があった。人々はそれを知らない様であった。感謝を感じ得るこの恵みを知る人々と知らぬ人々との幸福の差が思われて、また神に感謝せざるを得なかった。

僕は最早、病人ではない。身体は活発に働いているうちにどんどん丈夫にしてください。何も思い煩うことを要しない。太るも太らぬも可なりである。

神の国を攻^き究め求め、それに住まんのみがつとめである。

○1924年10月9日(木)

晴。秋の空のいとも清きかな。地には黄金色の穂が波を打つ。小鳥の囀りも鈴の音の如し。栗、柿、梨のみのりのゆたかなるよ。自然は常にかわらざる歩みを進む。雲も風も雨も皆はたらきて益をなす。自然は自然の法則によりて動く。

我もまた自然の兒なるべきを、自然より反せんとす。文明よし、しかれども自然に支配を受けよ。自然と抗して文明を建設せんとせば、文面は危うし、滅びなり。現代文明よ、よろしく自然を基として自然と共に歩みをつづけよ。ああ、我もまた自然に倅^{もと}らんとするか。帰れよ自然に。秋の月の清きかな。散歩して就床せしは10時半なりき。

The Christan is God Almighty's gentleman. 「基督者は全能の神の紳士である」

○1924年10月10日(金)

晴。この日記を記し始めてから丁度2ヶ年になる。信仰のほかは何も有つべきでないことを神様から教えていただいた。信仰、信仰、而して尚も信仰。

富山と散歩をした。ミルトンの偉大を讃美して神の御光を仰ぎしたった。夜の月は素敵であった。皆で散歩に出掛けた。僕は薬屋に南先生の処方のお薬をとり寄つて帰りに風呂屋へ行った。

入浴しに行ったのは今日の禍であった。湯桶につかっているときに突然、熱湯におそわれた。驚いて上つて来たときはすでに頭部、肩の上部一帯、左右の腕にと、かぶったあとであった。背に火を負わせられるの思いがして、唸らざるを得なかった。湯屋のものは倉皇、お醤油と、妙な薬とをもつて来て塗ってくれた。小憩後、車で帰寮した。桐寮の3人は非常に驚いて医者呼びに行ってくれた。床をのべてくれた。医者は1時間半ほどして来てくれた。3人の御尽力と親切に感謝した。2、3時間は、背中が燃える様であった。

10月10日、天譴来れり。これ当然受くべき苦盃である。神の聖意のいとも深いかな。いとも感謝なる御慰めなるかな。我が水戸へ遣わされたるは聖意を行わためなりき。然るを汝はサタンに誘われつつありき。神は正しくこれを罰し給い、我をして目覚めしめ給い



しなり。神よ、これ禍にして禍ならず。感謝すべき賜なり。神よ、この苦盃をして最も飲ばしきものとなさしめ給え。アーメン。

信仰。自然。沈着。アーメン。〔花瓶の花（菊？）のスケッチあり〕

○1924年10月11日（土）

晴。午前、宣ちゃんと病院へ行く。宣ちゃんに少なからずお世話になる。杉浦も暖かき心を以て、何かかと面倒を見てくれる。近藤もまた親切にやってくれる。見舞の客もある。団君も来てくれた。比企野も度々顔を見せる。午後から宣ちゃんは運動会へ行つた。楽しみなりし運動会も見ざるであつた。散歩も出来ず、小春日和の快き日を家中に過ごさねばならなかつた。天譴来りである。生と死との別れ目である。10月10日、火を負わせらる。忘るる勿れ、このよき日を、感謝の日を。罪を再びするなかれ。夜天雨くる。

○1924年10月12日（日）

雨後晴、明月。病院へ行く。段々癒される。有難くある。しかし左腕はちよつと面倒らしい。風呂湯をなぐつちやえと云つて同情してくれる人も居る。汝にしかしその権なし。天譴は彼の手によつて下されたるが故に、我に言葉も手もない。服するまでである。言う勿れ、責むる勿れ、彼を。彼は大きな過ちをしたるが故に、後悔し、同情して、心からあやまつている。ゆるせ、彼を。人知らず彼知らず、これ天の意なることを。我は直接に神より示されたるが故に知る。

午後からまた病院へ行く。痛んだので。医師は親切にやってくれる。我が罪ゆるされたり。神は見棄て給わざるなり。神の愛ははかり難し。故に畏れて再び罪におちいる勿れ。

今夜の月は何とも云えぬ。虫の音と秋の夜の冴え、ああ美なるかな自然。天然よ、水戸の自然よ。

林石巖君から、安部能成著『山中雜記』を送つて来た。かねてからのお約束である。帝大入学の記念と云うのであつたが、よく考えてみると、桐寮で共に生活し色々お世話になつたこともあるし、その思い出にとしての方が贈としてふさわしく、また、その意で贈つてくださったのは同意で有難くあつた。良書である。僕の書架に一良書、一良友が加わつた。彼の親切と熱き友情に感謝する次第である。夜、書簡を認めた。母上よ、我が火傷を知り給わざる母上よ、赦し給え、赦し給え。アーメン。

○1924年10月13日（月）

晴。午前、病院へ行く。右腕、頭部、背部は左程のことなくすみそうであるが、左腕は少々化膿したため、時日を要するらしい。

トルストイ、菜食論を読んで、僕が近頃、菜食主義に傾いているその度合いを益々深く



させられた。始めは肉食(獣肉)は消化時間の長いのと不良とを伴うために、胃腸のはたらかの弛緩している僕にはよくないと云うので廃^やめていた。それが段々馴れになって、肉を食べたいと思わなくなってきた。その中に、獣肉を食するは僕の性質上段々合わなくなってきた。それはそこに殺戮をとまなうからである。牛、羊、豚、鶏の如きは魚類とちがつて、はるかに人に近く、情を有するものである。彼等が、普段は愉快にくらしているのを、人間が、人間の都合のよいときに彼等を殺して食するは、どうも罪惡の様に思われる。少なくとも僕の心には、善と見えないのである。快と感ぜられないのである。快しとせざることをなすのは基督者として、神の紳士として出来ないものである。よし道徳上、惡にならずとも。そこで肉食が段々このましくなくなってきた。昼にコーンビーフを開く友達に勧められたが、その赤々とした肉を見て僕は到底、箸が出なかった。胃腸のためもあったが。しかし段々、宗教上、僕は肉食を嫌うものになり行く様である。概して肉食が必要ならざるに於てをや。菜食にて我々は十分生きて行ける様に神は創造し給うたのである。また、トルストイのこの書より、断食のことも教えられた。人間は自らの小智、小慾によりて亡びんとす。ああ偉大なるかな「人生の歌」。詩篇第23篇。

エホバは我が牧者なり、我乏しきこと非じ。

○1924年10月14日(火)

晴。すてきな月夜である。母上、兄上、武田の叔母上にお手紙を差し上げる。トルストイ、禁酒論を読む。誠に「何故に人は己れを麻醉せしむるか」である。現に高等学校生に於てその実例を何人見るか。社会の柱に立つ人間が此の如し。いつになったら人類は覚めるか。ああ自滅のみ。自滅の道をえらぶは人なりである。火傷、少しづつよくなる。

ここに詩人Schillerを友として、彼と、神の国を望まん。……〔独文省略〕……。

○1924年10月15日(水)

快晴。秋の美は連日の快晴によりて日に夜に示される。恵まれたる哉。午前、桐寮に一人で居る。手紙を書いたり、林からの贈書『山中雜記』を読んだり、日向ぼっこをしたりしている中にお昼となった。犬が来た。鳥が2、3羽飛んで来て、桜の木の枝にとまった。鳥は戯れ始めた。秋の日が強く彼女達の影を地上にうつした。地上の雀もおどり始めた。犬は驚いた。そしてとびついた。吠えた。縁の下にかくれた。ねらった。またとびついた。鳥は鳥で木の枝でチューチーチッチ言いながら枝から枝へととびまわっている。犬は夢中で影を追う。しまいにはやけになって、地面を引っ掻いている。僕はひとりでふきださざるを得なかった。実に自然の喜劇を演じている。こんな無邪気な、また真剣な喜劇を見たことがない。

忙しくなってきた。忙しくなれよ。秋は収穫時なり。何もわすれて、愉快に働け、遊べ。



僕は小食主義をとって、僕の胃を緊胃一番せしめてやる。自然主義、菜食主義、小食主義によって。いとも大いなる自然の法則よ、我が小さき身体の中にも働きて総てを大なる自然の法則によりて動かせよ。而して我は、悠々、自由、快談、快活にてあり得るなる。「ヤマイモ（ムカゴ?）の蔓葉と実のスケッチあり」。

○1924年10月16日（木）

曇、雨。……〔以下の聖句の独文省略、和文で記す〕……。

「キリスト肉體にて苦難を受け給ひたれば、汝らも亦おなじ心をもて自ら鎧へ。——肉體にて苦難を受ける者は罪を止むるなり——²これ今よりのち、人の慾に従はず、神の御意に従ひて、肉體に寓れる残の時を過さん爲なり。

……¹²愛する者よ、汝らを試みんとて來れる火のごとき試煉を異なる事として怪しまず、¹³反つてキリストの苦難に與れば、與るほど喜べ、なんぢら彼の榮光の顯れん時にも喜び樂しまん爲なり。」（ペテロ前4・1～2、12～13）

「²²彼は罪を犯さず、その口に虚偽なく、²³また罵られて罵らず、苦しめられて脅かさず、正しく審きたまふ者に己を委ね、²⁴木の上に懸りて、みづから我らの罪を己が身に負ひ給へり。これ我らが罪に就きて死に、義に就きて生きん爲なり。汝らは彼の傷によりて癒されたり。²⁵なんぢら前には羊のごとく迷ひたりしが、今は汝らの靈魂の牧者たる監督に歸りたり。」（ペテロ前

2・22～25）

姉上様が午後2時半頃、丁度、僕が眠りかけている頃、「ゴメンクダサイ」と云つて桐寮を訪ねられた。誰かと思つて出て行つて見ると姉上様である。驚きと歓びで迎えた。僕を見舞つて下さったのである。丁度、第五高女の遠足で水戸へ來られたので、而も忙しい折に寸暇を得て。その御親切に深く感謝し、心中涙に咽ぶ次第であつた。また、色々のお土産をさえ持つて來て下さった。只管、感謝した。元氣な僕を見て、安神された。母上様も御安神であろう。僕は、このペテロ前書を夜読んで、感謝すべきこと、祈るべきこと多々である。明朝は、おそらく断食して信仰の祈りをなしつつづけることならん。安らげく眠らしめ給え。我は救わる。アーメン。

○1924年10月17日（金）

商業学校のバザーが始まる。女学校の運動会がある。雪神様のお祭があると云うので今日は、水戸の市もいづれにもなく人通り繁く賑わつていた。

火傷も左腕と頭だけになった。近日全治する様であるのは、有難きことである。断食する。昼の栗飯もお赤飯も食せず、パンを少しいただく。百も二百も御承知のことを断行出来ぬのが僕の性分である。これほどなさないことは世の中にない。さらば過去なくして現在



と未来とのみある。汝は勇みて断行の二字を断行せよ。自然の兒よ。自然なれ。

○1924年10月18日(土)

晴、第5回記念祭。晩秋と云うけはいがある。葉っぱも風に散りだした。柿も残留は一つ二つ。高寮記念祭。明治神宮競技予選、記念祭余興、装飾、等を見て帰る。商業のバザーで、カラム〔ビリヤードに類似した盤上ゲーム〕を買った。桐寮に備えた。夕方5時頃になると、風が身にしみてくる。寒くなった。

○1924年10月19日(日)

曇。1924年もあと2ヶ月で終る。ああ迷える人なる哉。月よ、日よ、汝は待たざるなり。易らざる歩みを歩む。我は呼ぶ。あと2ヶ月の貴き汝等よ。1924年は終らんとす。さらば、その一日一日よ、働きて我に益となせ。我はつとめん。神のこと、ああただ神の命のみを。我が問題は神の義のみ。人の肉のことはすべて去れ。一躍して神の人とならん。易らざる光いとも貴き光、常に我を照らして光の中にあゆましめ給え。

めさめよ、我が霊、心励み力のかぎりに急ぎ進め。

散歩をした。常磐公園の天然水の湧出しているところへ来た。渴していたので、それを飲んだ。水が、清き水が、天然の水が滾々と湧き出ているそれを呑む。これほど生氣をつけられることはない様に感ぜられて実に甘かった。素敵だった。勇氣百倍した。ガブガブのんだ。天然の清澄なる山野の空気と、こんもりした森林中に湧き出づる天然の水と、それのみによって僕は生きていられるかの如く感ぜられた。純にして純なるものである。天然の兒よ、今日もまた汝は恵まれたり。一週間外出しないで、今日急にかなり散歩したので、かなりくたびれて愉快にへバツタ。夕飯で元気づけられたが、すぐ睡気を催して暫時眠ってまた起きた。カムロをした。全勝した。食のことは之我が関心事にあらざるを愈々深く知り行くは感謝である。

辰雄は、たおれかかりたる辰雄は、その根底に熱烈なる「光を望むの心」あるが故に、決してたおれず、次第次第に力を得て、やがては磐石の上に建設されたる城の如くならん。神よ、救い給え。アーメン。

○1924年10月20日(月)

雨。細雨終日降る。学校へ出て何となく疲れた。夜は速く寝たが、友達が来て談笑しているので安眠妨害されて困った。彼等の無遠慮になやまされること幾度なるかを知らずで、腹も立った。10時以後は談話を禁ずべき規則まもりを遵つてくれぬ。だからだした不規則の生活はいやである。厳然と独り、しまった生活を断行せんと感じた。



○1924年10月21日(火)

雨。今日も雨が降りつづいていた。病院へ行った。随分よくなった。繃帯がとれてやつと自分の身体のような感じがした。そこで思った。かたくるしい馬具をつけられて馬は、そのはじめ如何に窮屈に感じたろう。彼等、使役さるる動物が可愛そうに思われた。それからそれへと考えると、人間の我が儘を感じざるを得ない。内村先生の『宗教と現世』を読んで、心を新たにされた。

我が日常の糧は、空気と水とパンと、それよりも大切に聖書である。基督教である。無遠慮な友がまたさわぐ。安眠妨害である。

○1924年10月22日(水)

母上様の御手紙は誠に有難きものの至極である。感涙なくして読み得んや。勉強のさまたげ、睡眠のさまたげ、色々な点を考えて、彼と僕とは同居すべき人間でないことを思った。しかし、神様が耐えよと言われるならば、神命に之服するのみである。とにかく、僕は僕で厳然と僕の道を歩こう。兄上、逝きて3年1ヶ月。辰雄よ、思え、歩け。

○1924年10月23日(木)

晴。霽れたと云うものの至極、スレトニングスカイ(すぐにも崩れそうな空模様)である。午後、附属の2年生の1団を案内すべく公園へ行った。110余名の1団である。佐藤先生(フーセン)、中川先生(チャーボー)その外、二人の先生が引率した。2年生は、1、2、3の組の3組である。随分多数(オーゼー)居る。鳥居の側で記念撮影をした。吐玉泉へつれて行ったら、皆実によく飲んだ。天然水は何とも云えぬらしい。僕は僕でまた牛飲した。実に何とも云えぬ美味である。高等学校庭へつれて来て、暫く見物の後、フットボールの仕合をした。とても巧みである。1対0で僕達卒業生の負けであった。彼等の伎倆には他の連中も舌を捲いている。夜は皆で太平館へ歓迎に行ったが、僕はやや消耗しているので残念ながら行かなかった。火傷も大抵は癒ったが。

○1924年10月24日(金)

斎藤の叔母様とレン子さんから御音信をいただく。お見舞状にセーヌ河の絵葉書を。消耗した。10日あまり、火傷のためになやまされて。しかし、今日すっかり繃帯がとれた。全快した。感謝である。明日より再び活動の身となる。願わくは更に更に信仰のよき戦を戦わしめ給わんことを。我が、ならんと欲するものは、何でもない。ただ、信仰の勇者とならんことのみ。

3年! 2ヶ月! よくおぼえよ、汝。一日一日は誠に大切な主の賜なり。



○1924年10月25日(土)

晴。朝の気が寒冷である。夕靄の落りるころも、膚にしみる様なつめたさである。白菜が青々と畠にならんでいる。コスモスが満開である。火傷全治して、病院のはらいをすませた。丁度2週間になる。入浴した。実によい気持になった。いくら洗っても垢が出るには閉口して、いいかげんでやめることとした。自転車を乗りまわした。テニスをもやった。愉快でたまらなかった。感謝の心に満ちた。消耗したのを回復させるのは次の1週間である。あとは自然の勢いでどんどん進む。

心の病人、身体の病人、それは誠に長き間であつた。大なる時の浪費であつた。大なる金の浪費であつた。更に更に大なる不孝であつた。また、自己に關しても大なる愚なること、恥すべきこと、悔い改むべきこと、損失であつた。汝は誠によくも、邪道に入つたものである。よくも漂浪うたものである。よくも怠けたものである。

しかし、これらのことはすべて忘れよ、と仰つてくださる方が居られる。それは人ではない。神の独子、イエス・キリスト、我が主である。忘れしめてくださるばかりでない。ことごとくゆるしてください。きよめてください。

ああ、ルーテルよ、我もまた汝の如く徹底せる神の子とならん。願わくは、祈れ、神に。主よ、願わくは、浄め給え。再び罪に入ることなからしめ給え。

○1924年10月26日(日)

快晴。午前、斬髪屋へ行く。それから宣ちゃんと散歩に行く。公園の吐玉泉で清水を飲んだ。実によくこの頃は水を飲む。天然水の胃腸を浄める様な氣のするのが何とも云えない。稲を刈っている田を前にして草の上に腰をおろし、遠ざかる汽車を見たり、桜山の移りゆく木の葉の色をながめたり。空を仰いだりして丁度12時の午砲のなるまで話した。帰って昼食をすませて学校へ行つた。世界的大スポーツマン、ノルトン、シオルツ、スペアロー、ミークラの模範演技を見た。実に驚くべきものである。色々得るところや、感心するところがあつた。ミークラの槍、スペアローの棒高跳、シオルツの200m、ノルトンの円盤、砲丸、走高跳、高障碍。その世界的なるを見ては驚嘆の外はない。

○1924年10月27日(月)

快晴。起床7時半。大車輪で支度をして出掛けた。実にいい天気。何と云う恵まれたことだろう。通学するその途中がいい。大根を小川であらっている。黒ん棒が白ん棒になつてつきかさなっている。この感ずること切であるから何度でも書くのである。汝はその損失たるや大なり。その得んとするものはこれにくらぶべくもなくまた大なり。故に、心を強うしてあゆめよ。

「³³天地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎゆくことなし。³⁴汝等みづから心



せよ、恐らくは飲食にふけり、世の煩勞にまとはれて心鈍り、思ひがけぬ時、かの日羅のごとく來らん。³⁵これは偏く地の面に住める凡ての人に臨むべきなり。³⁶この起るべき凡ての事をのがれ、人の子のまへに立ち得るやう、常に祈りつつ目を覺しをれ』(ルカ21・33～36)〔独文〕

主よ、我が身体の健康を全く主に委ね奉ります。

主よ、我は我が信仰の道を確く歩まん。

主よ、我に力と光とを与え給え。

主よ、我は我が為すべきを為さん。これ皆主の聖業なればなり。

主よ、我がなすべき愛の業は限りなし。我が全力をこれに注ぎて、己が我慾はこれを悉く忘れしめ給え。この世は、我、困苦しむために主より与えられたるものなり。我は犠牲となりて、我は十字架を負いつつ、歩むを以て最大の幸福、最大の歡喜となすものであります。

主よ、願わくは、この願いの日々叶い行かんことを。益々、神の僕にふさわしきものとなさしめ給え。

神、我を愛し給えり、給う、給わん。我を信頼し給えり、給う、給わん。

○1924年10月28日(火)

晴。冷水摩擦を始めた。全く火傷の治ったのを感謝し奉る。凜たる晩秋の朝の氣に膚をさらして、肅然とするのは、我が肉体が天然の氣に浄化されるの心地がする。雨が一寸降った。今晚はすこし勉強が出来たが、自分のスピードのおそいのと、力のないのを感じた。断然、英、独の勉強である。

○1924年10月29日(水)

晴。何とも云えない小春日和。かのインディアン・サマー〔晩秋に暖かい日和が続く時期〕である。愚かな道を歩む勿れ。汝のうちにサタンあり、汝の四圍まわりにサタンあり。すべてのけがれより遠ざかれ、くだらぬ者どもがくだらぬ耽美に耽つている。それは僕の関すべきものではない。彼等は如何にあらうとも、如何に僕に対すると、僕は厳然として千代に動かざる磐石である。それは僕の生命である。グンデルト先生の熱心は僕の夢にあらわれた。彼先生の如き勤勉家たらんことを望む。Work Hard and fear God.〔一生懸命働き、神を畏れよ〕である。おそからず、汝は選ばれたるものなり。常に眼を覺まして歩みせよ。

○1924年10月30日(木)

晴。先生が二人休んだので都合よくも午前で授業は終り、2時の汽車に悠々と間に合った。車中、4、5人の友と共であつた。車は最新のもので実に感じがよかった。『山中雜記』を読んで



大いに教えられるところ、感ずるところがあった。果たしてこれは良書である。帰宅したのは6時半頃。四郎ちゃんが来て居られた。今日、母上と神田上水を散歩されたとのこと。母上も大層御元気で居られる。

入浴、夕食。炬燵の出来ているのには驚く。キミちゃん、ヨチヨチ歩けるのにも驚いた。「お障子を破くとオバアサンがなんとおっしゃる」と云うと、「ウーン」と云つてうなる。実に愛嬌たっぷりである。久しぶりでゆつくりと家の人とお話しして、のんびりした。

○1924年10月31日(金)

晴。午前7時半起床。芝プールへ水泳を見に行った。50mコースである。高石の腕前は斬然頭角をあらわしている。400mで2着と50mの差である。始めて水泳の競泳と云うものを見て面白かった。この寒天に皆元気である。冷たくなければ、泳ぎたかった。午後は明治神宮参拝、それから外苑へ行きスタディウムの中へ入った。かのオリンピック競技場を想い見るに十分なる堂々たるものであった。ア式蹴球、ラグビーを見た。高声電話が用いられていた。飛行機が飛来して、場の上空を旋回していた。ビラも撒いた。飜々として落下して来た。5時帰宅。随分歩いたのでくたびれた。夕飯後、母上様と武田へ行った。叔父、叔母様が僕の丈夫なのを喜んでくださった。母上と手をとって、しずかな夜を歩いて来るのは何とも云えなく楽しいものであった。

